

特別な内斜視の鑑別

| | 両外転神経麻痺 | 開散麻痺 | 非調節性輻湊過多型内斜視 | 先天(本態性乳児)内斜視 | 眼振阻止症候群 |
|--------|--|---|--|---|---|
| 第一眼位 | <p>遠方 内斜視</p> <p>完全麻痺の場合</p> <p>麻痺の少ない方の眼で固視</p> <p>近方 内斜視</p> | <p>遠方 内斜視</p> <p>近方 ほぼ正位</p> | <p>遠方 内斜位又は正位</p> <p>場合によっては遠方が斜視の場合もあるが、近方より少ない</p> <p>近方 内斜視</p> | <p>遠方 内斜視</p> <p>近方 内斜視</p> | <p>遠方 内斜視</p> <p>近方 内斜視</p> |
| むき運動 | 両外転制限あり | 外転制限なし(合併がないなら) | 外転制限なし(正常) | 見かけ上の両外転制限あり | 見かけ上の両外転制限あり |
| ひき運動 | 両外転制限あり | 外転制限なし(正常) | 外転制限なし(正常) | 外転制限なし(正常) | 外転制限なし(正常)だが、固視眼が外転すると眼振が出る |
| 眼球運動障害 | あり | なし | なし | なし | なし |
| 複視 | 新鮮な場合、同側性複視(遠方で増加するが開散麻痺ほどではない) | 遠方 同側性複視 近方 通常ない(斜視がない場合) | 遠方 通常ない(斜視がない場合) 近方 同側性複視 | 通常ない(交差固視するということは片眼抑制) | 通常ない(交差固視するということは片眼抑制) |
| 両眼視 | 両眼視確立後の発症で新鮮な場合両眼視あり 早期発症の場合は交差固視となり両眼視不良 | 両眼視あり | 両眼視あり | 両眼視なし(交差固視するということは片眼抑制) | 両眼視なし(交差固視するということは片眼抑制) |
| 弱視 | 通常なし | 通常なし | 病態により様々だが、通常なし | 交差固視があるので通常軽度。(他の斜視との合併や交差固視の度合いにもよるが) | 病態により様々だが交差固視があるので、通常なし。 |
| 頭位異常 | 通常不全麻痺や麻痺の程度に差がある場合はなし 完全麻痺なら固視する側に顔向け | 通常なし | 通常なし | 通常なし | 固視眼側に顔向け(輻湊眼位や固視眼の内転で軽減するので、輻湊した固視眼で前方を見る為)片眼が視力不良の場合は、(正面と視力不良側は)視力の良い方向へ顔向け 視能学第2版P443 |
| 臨床所見 | 両眼とも輻湊眼位をとることが多く、両眼とも外転できない 頭部外傷の場合が多く、複視を自覚する 複像間距離は注視方向による差がある | 輻湊した位置から開散できず、遠見で著明で近見で消失あるいは軽減する 内斜視が突発し、同側性複視を訴える 複像間距離は注視方向による差はない | 過剰な近接性輻湊による内斜視で、近見斜視角が遠見斜視角より大きい(視能学より) | 斜視角は 30°以上と大きい 交代性上斜位、潜伏眼振、顕性潜伏眼振、下斜筋過動症を伴うことが多く、その場合は内斜視角が変動する 見かけ上の外転障害、内転過剰、斜筋異常を示すことが多い 斜視弱視の合併が多い(視能学第2版 P355 より) | 乳幼児期に急激な大斜視角の内斜視が発症 両眼ともしばしば内転する 内斜視が増加すると眼振が減少する 内転位では両眼とも眼振は起こらない 眼球を外転方向に向かせるに従って眼振の振幅増大 交差固視(視能学第2版 P443 より) |
| ヘスチャート | 両眼とも外転制限があるので、内転方向のチャートが大きくなる オーバーアクションとなる | 両眼とも外転制限がないので、内転方向のチャートは同じ(位置は内斜でも正位でもOK) 通常の共同性内斜視又はほぼ正位の図となる | 通常の共同性内斜視 | 乳児でありかつ両眼視不良で検査不可能 | 眼振が出るとはっきりせず、交差固視すると両眼視不良で検査不可能 |
| | | | | | |